

## 2017 年における酪農学園大学野生動物医学センター WAMC の 教育・啓発活動報告

浅 川 満 彦\*

Annual report of educational activities performed by the Wild Animal Medical Center  
of Rakuno Gakuen University in 2017

Mitsuhiko ASAKAWA\*  
(Accepted 11 December 2017)

### はじめに

2004 年 4 月、酪農学園大学野生動物医学センター（以下、WAMC）は文科省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（酪農学園大学大学院，当時代表：谷山弘行 元教授，現・酪農学園理事長）の一環として，大学附属動物病院（現・動物医療センター）構内に設立された。WAMC は野生種のみならず，動物園水族館（以下，園館）飼育種，アルパカやダチョウなどの特用家畜，エキゾチックペットなどを対象に諸活動を展開してきた。この施設は 2017 年で設立 13 周年をむかえたが，本学の戦略事業は 2003 年から開始されたので，今年 14 年目（3 期 5 年目，現代表：横田 博 教授）となった。今期総合課題は『生産動物の感染症病原体と感染因子の解析，その効果的な防御対策』，WAMC では『特用家畜等を含む生産動物の感染症・寄生虫病防御対策とその基盤となる網羅的な病原体の把握』を分担している。2017 年が最終年度，総括の年となる。

WAMC における諸活動報告は北海道獣医師会誌上に掲載されてきたが，直近の 2016 年分は研究が従前通りその雑誌で扱われたものの<sup>[1]</sup>，教育・啓発活動については本学紀要で紹介された<sup>[2]</sup>。本稿でもこれに準じ，後者のみを扱うことにした。しかし，大学は研究を基盤にする教育機関なので，教育（そこから派生した啓発）を研究から切り離すことは難しい。そこで，研究編<sup>[24]</sup>を当該年内に刊行された論文業績の概要紹介に限定し，それ以外の未刊行のものは本稿で扱うことにした。したがって，WAMC を拠点にする学部生（浅川ゼミ）や研究者などの学会発表（表 1-1 から-5）はこちらに包含さ

れる。もちろん，書籍書評・紹介<sup>[1-12, 19-21, 25, 26, 28, 29]</sup>，施設概要・公務関連雑文<sup>[14-18, 22, 23, 30]</sup>，WAMC を拠点にした野生動物医学研修など（表 1-6 および-7）とその実施報告<sup>[13, 27]</sup>なども本稿の対象とした。

なお，著者は WAMC で得られた諸研究の成果は寄生虫病学および野生動物医学双方の教育にも応用をしている。特に，寄生虫病学担当の大学院獣医学研究科指導教員有資格者は，数年前から著者一人のみなので，当然，この教育活動には大学院における関連活動も包含される。

### ゼミ生による学会報告

WAMC を研究の拠点にするゼミ生は，日本野生動物医学会学術集会で筆頭演者として発表することが義務付けられている（表 1-1 から-5）。これは研究室の演習（正規な科目）の一環とされているからである。研究室の演習なので，発表の機会は 6 年次と 5 年次の計 2 回となり，どちらかが課題研究（卒業論文に相当）とは関連しない研究内容を演題として発表することが多い（すなわち，本ゼミでは一人が複数の研究課題をこなしている）（図 1）。

6 年生が今年行った演題は，西表島産鳥類が保有していた寄生蠕虫類の調査，ニホンジカにおける *Onchocerca* 属線虫の疫学と病理および愛玩用として流通していたあるいは外来種化した爬虫類の寄生虫調査相であった。さらに，これらのデータを別の切り口からまとめ，線虫学会，寄生虫学会，鳥類臨床研究会，SCAPARA（爬虫類医学に関する任意団体の勉強会）などでも紹介された（図 2）。彼ら 6 年生はこの発表により WAMC 業務から引退し，入れ替わりに 4 年生が配属される。2017 年も 1 教員

\* 酪農学園大学獣医学群獣医保健看護学類

Faculty of Veterinary Science, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

連絡先 (Correspondence) : askam@rakuno.ac.jp 2020 年 3 月まで上記学校に出向中

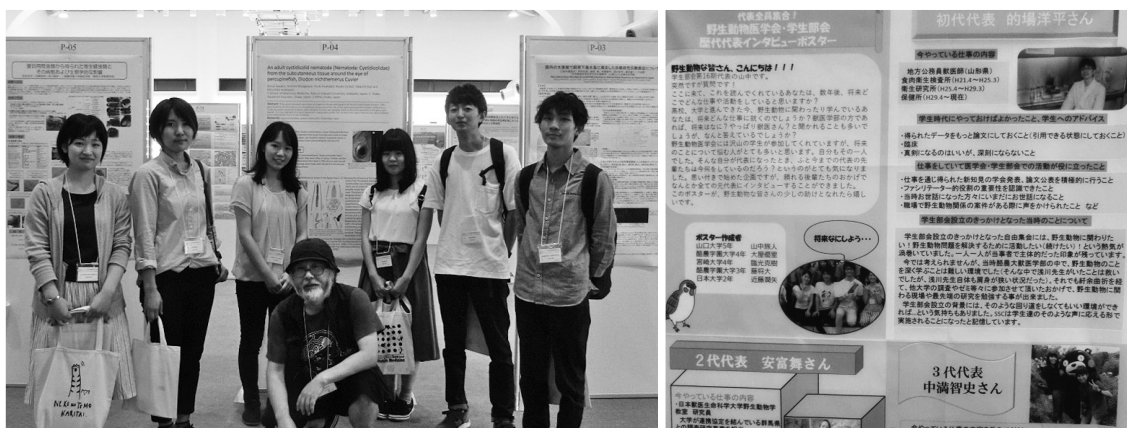


図1 日本野生動物医学会東京大会でポスター発表をしたゼミ生（左）とその会場で掲示された同学会学生部会ポスター（右：歴代の同部会代表からの一言が紹介されていた。WAMCでの研究で博士号を得た的場洋平氏が初代表のコメント有り）

3名定員を遵守し、4年3名（WAMC創立して15期目）が分属した。その新人を教育するのが5年生である。彼らの発表内容は、まず、モンゴルの半野生化したノミにおける寄生蠕虫類保有状況調査で *Echinococcus* 属条虫寄生の関連性について野生イヌ科動物との比較により分析したものとの釧路動物園の飼育哺乳類から得られ、同園に保存されていた寄生蠕虫標本の回顧的調査であった。これらは、いずれも、以前の調査研究の続報となるものであった。もう一人が水族館飼育魚類の *Cystidicolidae* 科線虫に関するもので、学会発表の前に国際誌に掲載された内容であった。これを担当したゼミ生は本学附属高校獣医進学コース出身の学部生であり、学部生が筆頭著者となった国際誌掲載は WAMC では10年ぶりの快挙であった<sup>[1]</sup>。「研究は専門誌に公表されて完結する」という原則は本ゼミ活動においても同じで、学会発表で終わってしまっては研究上、無に等しいことは繰り返し伝えているので、今回のような国際誌上での論文掲載はゼミ生へ刺激を与えるであろう。

### 学生による公開講座の目的と概要

野生動物医学が日本で立ち上がって20年以上が経過したが、一般にこの学問分野の使命と内容が理解されているとは言い難い。これは野生動物学が、2017年2月（本学）から獣医学コア・カリキュラムに準じた共用試験対象科目に指定されても同様である。野生動物医学に限らず、どのような研究であっても、科研費のような公的資金が必須である。そして、このような研究費の原資は国税であり、これを負担するのは国民である。そうすると、国民への研究目的やその内容理解の周知は必須となる。特に、

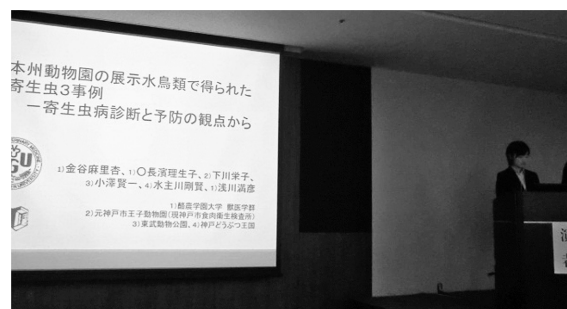


図2 鳥類臨床研究会で報告をするゼミ生

比較的新しい学問分野である野生動物医学では、研究と同時に啓発も行う必要性がある。まず、この点を、ゼミの所属する前に理解させ、ゼミ活動では学生が主体で啓発活動を行うことが了解されている。そして、著者が行う公開講座のサポート（図3）や彼ら自身が教壇に立ち市民や子供達と直接接する形で、いくつかの公開講座や研修などを主催している（表1-6）。もちろん、これは正規な単位認定を伴う授業の一環でもある。

たとえば、2017年で5回目となる科研費還元事業（独）日本学術振興会主催『ひらめき☆ときめきサイエンス ― 獣医の卵達と一緒に、野生動物保護とその病気の関係について考えよう！』でも、ゼミ生が小学5、6年生を対象に解り易く授業する（図4と5）。この事業は、科研費を代表者として助成された課題を基に実施されるので、著者の場合、すでに終了した2課題『野生動物および動物園動物の保護増殖計画上問題になる寄生線虫症に関する疫学的研究』および『陸上脊椎動物と線虫の宿主 ― 寄生体関係に関する保全医学的な試み』、2018年度で最終年度となる『動物園水族館動物に密かに蔓延する多

表 1 WAMC を拠点にした活動（講演・研修なども含む）のうち、2017 年 1 月～12 月における各種学会学術集会・研究会における口頭／ポスター発表などの一覧

### 1. 在来種（爬虫類・鳥類）

金谷麻里杏・日名耕司・浅川満彦：西表島で得られた野生鳥類の寄生線虫保有状況。第 86 回日本寄生虫学会大会，北海道大学，2017 年 5 月 28 日から 29 日  
 Kakogawa, M., Onuma, M. and Asakawa, M.: Some records on parasitic and infectious diseases from free-ranging or captive avian species with special reference to recent cases dealt with the Wild Animal Medical Center, Rakuno Gakuen University, Japan. The 10th International Meeting of Asian Society of Conservation Medicine, Malaysia, 20th-23rd Oct.  
 Onuma, M., Kakogawa, M. and Asakawa, M.: Molecular surveillance of avian influenza virus in Japan between 2008 and 2015. NIER-USGS Workshops-International workshops for new emerging disease and avian influenza in wildlife, Korea, 16th-18th Jul.  
 金谷麻里杏・日名耕司・浅川満彦：西表島産野生鳥類から得られた線虫類以外の蠕虫について。第 23 回日本野生動物医学学会大会，日本獣医生命科学大学，9 月 1 日から 3 日  
 吉野智生・飯間裕子・百瀬邦和・志村良治・松本文雄・浅川満彦：野生タンチョウにおける寄生虫保有状況。第 23 回日本野生動物医学学会大会，日本獣医生命科学大学，9 月 1 日から 3 日  
 浅川満彦：酪農学園大学野生動物医学センター WAMC を拠点にした野生鳥類対象の疾病調査研究（概要）。第 12 回バー ドリサーチ研究集会，美唄，9 月 30 日  
 田川 愛，浅川満彦，金谷麻里杏，江崎保男。2017. ヘビ類に寄生する吸虫類とマダニ類——兵庫県豊岡市での高い寄生率。第 56 回爬虫両棲類学会大会，熊本大学，2017 年 11 月 25 日。

### 2. 在来種（哺乳類）

近本翔太・浅川満彦：酪農学園大学野生動物医学センター WAMC に依頼された車輛付着の獣類体毛鑑定と示唆された野生動物交通事故に関わる問題点。第 16 回「野生動物と交通」研究発表会，北海道大学，2 月 17 日  
 浅川満彦・羽山伸一・岡本宗裕：ニホンザル（*Macaca fuscata*）における寄生蠕虫相の概要——特に，最近の東日本における調査から判明した地理的分布域に関して。第 72 回日本生物地理学会年次大会，東京大学，4 月 9 日  
 浅川満彦・羽山伸一・岡本宗裕：東日本におけるニホンザル（*Macaca fuscata*）の寄生蠕虫相（概要）。第 33 回日本霊長類学会大会，福島，7 月 15 日から 17 日  
 垣内京香・石黒佑紀・齋藤 萌・松田一哉・浅川満彦：北海道産ニホンジカから検出されたオンコセルカ亜科糸状虫類の分類学および病理学的な検討。第 23 回日本野生動物医学学会大会，日本獣医生命科学大学，9 月 1 日から 3 日  
 垣内京香・杉山 広・浅川満彦：ニホンジカに寄生するオンコセルカ亜科糸状虫類について。日本線虫学会第 25 回大会，札幌，9 月 20 日から 23 日

### 3. 外来種

浅川満彦：中部地方に生息する外来性哺乳類アメリカミンクおよびハリネズミの寄生蠕虫相から想像される生態と病態。哺乳類学研究交流ゼミ，北海道大学，5 月 15 日  
 荒川祐衣・村田 亮・佐鹿万里子・松田一哉・小泉信夫・浅川満彦・内田郁夫・菊池直哉：北海道のアライグマにおけるレプトスピラ浸潤状況の変遷。第 160 回日本獣医学会学術集会，鹿児島大学，9 月 13 日から 15 日  
 長濱理生子・Enkhtuya Byambanyam・Gantigmaa Chuluunbaatar・岡本宗裕・柳田哲矢・伊藤 亮・浅川満彦：モンゴル国ウランバートルの半野生化したイヌにおける寄生蠕虫類保有状況調査——特に同国の野生哺乳類におけるエキノコックス属条虫保有状況との関連性。第 23 回日本野生動物医学学会大会，日本獣医生命科学大学，9 月 1 日から 3 日

### 4. 飼育種（魚類・両生類・爬虫類・鳥類）

田中祥葉・田口勇輝・野田亜矢子・野々上範之・浅川満彦：動物園飼育下オオサンショウウオ（*Andrias japonicus*）から得られたアタマビル *Hemiclepsis marginata* (Hirudinida: Glossiphoniidae) の記録。第 69 回日本衛生動物学会大会，長崎大学，4 月 14 日から 16 日  
 吉田圭太・加藤英明・浅川満彦：小学校で飼育されていた淡水カメ類から得られた寄生虫。第 18 回カメ会議，いしかわ動物園，3 月 18 日から 19 日  
 吉田圭太・加藤英明・浅川満彦：静岡県内の某小学校で飼育されていた淡水カメ類から得られた内外寄生虫保有状況。第 160 回日本獣医学会学術集会，鹿児島大学，9 月 13 日から 15 日  
 吉田圭太・加藤英明・浅川満彦：愛玩用爬虫類から得られた寄生蠕虫類とその病因。第 23 回日本野生動物医学学会大会，日本獣医生命科学大学，9 月 1 日から 3 日  
 佐々木梢・恩田紀代子・宮側賀美・喜屋武樹・伊東隆臣・浅川満彦：水族館飼育ポーキュパインフィッシュ *Diodon nichthemerus* (フグ目ハリセンボン科) の眼球周囲組織に寄生した線虫摘出症例と得られた Cystidicolidae 科線虫の分類学的検討。第 23 回日本野生動物医学学会大会，日本獣医生命科学大学，9 月 1 日から 3 日  
 金谷麻里杏・長濱理生子・下川英子・小澤賢一・水主川剛賢。浅川満彦：本州動物園の展示水鳥類で得られた寄生虫 3 事例——寄生虫病診断と予防の観点から。鳥類臨床研究会第 21 回大会，東京，10 月 8 日  
 吉田圭太・加藤英明・浅川満彦：愛玩用爬虫類から得られた寄生蠕虫類とその病態および生態学的影响。SCAPARA2017，麻布大学，12 月 3 日

### 5. 飼育種（哺乳類）

竹内萌香・鳥居善和・浅川満彦：消化器症状を呈したイエネコにおける線虫 *Soboliphyme baturini* の寄生事例。平成 28 年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会，金沢，2 月 24 日から 26 日  
 林 英明・荒井千種・外平友佳理・佐野忠士・鈴木一由・浅川満彦：Lumpy Jaw Disease (LJD) 罹患カンガルーにおける被毛中コルチゾールを用いたストレス評価。平成 28 年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会，金沢，2 月 24 日から 26 日  
 伊藤このみ・村上翔輝・野間康平・伊東隆臣・藤田かおり・辻 一・長濱理生子・柳井徳磨・浅川満彦：リスザルにおけるマンソン孤虫症 2 例について。第 65 回動物園水族館技術者研究会，東京，2 月 1 日。  
 Kuchboev, A. E., Amirov, O. O., Karimova, R. R. and Asakawa, M.: Nematodes of digestive tract of domestic ruminants in Uzbekistan. 第 86 回日本寄生虫学会大会，北海道大学，5 月 28 日から 29 日  
 横江果林・外平友佳理・能田 淳・鈴木一由・浅川満彦・世良耕一郎：Lumpy Jaw Disease (LJD) 罹患ハイロオオカンガルーにおける血漿中エンドトキシン活性値と微量元素動態。第 23 回 NMCC 共同利用研究成果発表会，岩手医科大学，5 月 1 日  
 生駒 忍・藤本 智・長濱理生子・浅川満彦：チンパンジーにおける重篤な蟻虫症でアルベンダゾール投与により著効が認められた 1 例。第 23 回日本野生動物医学学会大会，日本獣医生命科学大学，9 月 1 日から 3 日



近本翔太・吉野智生・志村良治・浅川満彦：動物園飼育哺乳類における寄生蠕虫症の回顧的調査（続報）．第23回日本野生動物医学学会大会，日本獣医生命科学大学，9月1日から3日

東 美緒・外平友佳理・佐野忠士・鈴木一由・浅川満彦・林 英明：オオカンガルー（*Macropus giganteus*）における被毛中コルチゾール含有量の変動要因について．第23回日本野生動物医学学会大会，日本獣医生命科学大学，9月1日から3日

Yokoe, K., Sotohira, Y., Noda, J., Suzuki, K., Sera, K. and Asakawa, M.: Plasma endotoxin activity and trace elements kinetics in *Macropus giganteus* infected-Lumpy Jaw Disease (LJD). Chemical Hazard Symposium-Joint Seminar on Environmental Chemistry and Toxicology, Hokkaido Univ., 2nd Aug.

安齋雅彦・Oine, P. M.・鈴木一由・浅川満彦：ウガンダ・ワキソ県の一と畜場における牛での肝蛭寄生率実態調査．第68回北海道獣医師大会・平成29年度北海道地区学会，酪農学園大学，9月8日

#### 6. ゼミ演習としての啓発活動

Asakawa, M. and his students: Wildlife medical lecture titled “Ecotourism vs Wildlife – Case Report on Conservation Medical Assessment in Hokkaido, Japan”, and drill of wildlife postmortem and making/blowing immobilizing dart for students of Univ. Findlay, USA, organized by EX center, Rakuno Gakuen Univ., 5th Jun.

浅川満彦・ゼミ生：ゼミ生による野生動物医学に関する課外授業（スライド座学，吹き矢デモ，野外踏査実習）．とわの森三愛高等学校獣医学進学コース1年特別授業，酪農学園大学野生動物医学センター，6月10日から11日

浅川満彦・ゼミ生：救護実習・遺体を使って保定・経口投与，接骨術，計測の実習．野生動物リハビリテーター協会初級認定講座，酪農学園大学研修館および同野生動物医学センター，6月3日から4日

浅川満彦・ゼミ生：獣医の卵達と一緒に，野生動物保護とその病気の関係について考えよう！（独）日本学術振興会ひらめき☆ときめきサイエンス事業，酪農学園大学，8月1および2日．

浅川満彦・そのゼミ生：獣医の卵たちによる勉強会——爬虫類・哺乳類を知ろう（全7回），酪農学園大学野生動物医学センター独自企画（仮），酪農学園大学研修館，6月12日から7月31日（毎週月曜）

Asakawa, M. and his students: Wild animal medical short course for students of Kasesart University, Thailand, Advanced Hygiene and Environmental Sciences, Collaboration of Veterinary Education between Japan and Thailand (*Sekai-Tenkai-Ryoku*), Rakuno Gakuen Univ., 20th-21st Sep. and 9th-10th Nov.

浅川満彦・WAMC/SSC 開催委員会：WAMC-SSC．日本野生動物医学学会主催 SSC，酪農学園大学，9月8日から11日

浅川満彦・そのゼミ生：酪農学園大学 EX センター主催市民公開講座「獣医の卵たちによる勉強会——爬虫類・鳥類を知ろう（前後編）」．酪農学園大学研修館，12月2および3日

#### 7. その他（解説・総説・保全教育・啓発・研修講師など）

浅川満彦：感染症と生物毒の中毒とは異なる——保全生態学的戦術立案の前提として両者峻別が必須．日本生態学会2016年度北海道地区大会，北海道大学，3月3日

浅川満彦：道内の地域別に回顧された酪農学園大学野生動物医学センター WAMC における研究概要．2016年度北海道自然史研究会・研究大会，北海道大学，2月18日

浅川満彦：富栄養化環境で問題視される新興的な寄生虫病——最近経験された事例から．石狩川フォーラム，美唄，3月5日．

浅川満彦・郡山尚紀・佐野忠士・北澤多喜雄：動物看護学課程で提供される望ましい野生動物（医）学教育とは——酪農学園大学獣医学群における事例から．日本動物看護学会第26回大会，ヤマザキ学園大学，7月1日

浅川満彦：酪農学園大学野生動物医学センターでの外部寄生虫症例概要．第25回ダニと疾患のインターフェース，南伊勢，6月9から11日

浅川満彦：野生動物の感染症，日本野生動物医学学会主催野生動物入門セミナー．国立女性教育会館，9月5日．

Asakawa, M.: Several topics on parasitic helminthiasis and helminths from free-ranging or captive vertebrates with special reference to recent cases dealt with the Wild Animal Medical Center, Rakuno Gakuen University, Japan. The 3rd International Congress of Parasites of Wildlife, South Africa, 24th-27th Sep.

浅川満彦：2017年における酪農学園大学野生動物医学センター WAMC の研究活動報告．第68回北海道獣医師大会・平成29年度北海道地区学会，酪農学園大学，9月8日

浅川満彦：わが国の動物看護学課程における野生動物（医）学教育内容を考える——獣医コアカリとの比較から．第23回日本野生動物医学学会大会，日本獣医生命科学大学，9月1日から3日

浅川満彦：獣医さんはいかにして野生動物を救うのか．株式会社フロムページ主催夢ナビライブ in Osaka——大学進学のための学問発見イベント，大阪，6月17日

浅川満彦：獣医学等のコア・カリキュラムに準拠した教育展開の現状と課題．第67回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会，東北大学，8月24日

浅川満彦：野生動物医学入門——エキゾチックペット医療分野で活躍する獣医師とは．酪農学園大学エクステンションセンター生涯学習課主催市民講座，酪農学園大学，6月25日

浅川満彦：園館展示動物における寄生虫病——簡易的な検査と同定・診断の実際．第23回日本野生動物医学学会大会（自由集会）．日本獣医生命科学大学，9月1日から3日

浅川満彦：身近な自然に生きる野生動物（座学と実習）．平成29年度佐呂間町教育委員会・酪農学園大学遠湯地域総合交流推進協議会共催夏休みサイエンス講座および出張授業，佐呂間，8月3日から4日および10月4日から5日

浅川満彦：酪農学園大学におけるコアカリとユニット制導入の現状と今後の課題．第28回全国私立大学教育研究集会，福岡工業大学，8月27日から28日

浅川満彦：ナイトハイク．酪農学園大学エクステンションセンター生涯学習課および生化学ユニット主催ひらめき☆ときめきサイエンス事業，酪農学園大学および野幌森林公園，8月7日

浅川満彦：肺の寄生虫．とわの森三愛高等学校獣医学入門，とわの森三愛高等学校，10月3日

浅川満彦：第3回「野生生物の寄生虫に関する国際会議」で報告された飼育動物の疾病に関する演題の概要紹介．獣医臨床寄生虫学研究会2017年度例会，東京大学，12月16日

浅川満彦：アジア諸国獣医師研修の一環による WAMC 視察．日本獣医師会主催アジア地域臨床獣医師等総合研修事業，酪農学園大学，7月31日

浅川満彦：リハビリテーターが知るべき野鳥感染症の概要と代表的な寄生虫病検査（講義および実習）．野生動物リハビリテーター協会中級認定講座，酪農学園大学研修館および生物学実験室，10月28日

浅川満彦：獣医師はいかにして野生動物を救うのか．北海道立札幌平岸高等学校大学等出張講義，同高校，11月14日





図3 本学エクステンションセンター主催公開講座（エキゾチックペット医療に関する講演）にて動物展示を協力するゼミ生



図4 科研費還元事業（独）日本学術振興会主催『ひらめき☆ときめきサイエンス—獣医の卵達と一緒に、野生動物保護とその病気の関係について考えよう！』の様子



図5 図4の続き

様な寄生虫病の現状把握とその保全医学的対応』が基盤となる。これら課題は野生動物や園館飼育動物における寄生虫病に軸足を置いたものであった。なお、この時捕獲したアカネズミを直後に佐呂間町で行った出張講義でも公開した（図6）。

その他、日本獣医師会主催事業アジア諸国獣医師研修の一環による WAMC 視察（図7）、米国フィンレー大学 PreVet 課程などの学生対象授業（図8）、酪農学園大学と学術交流協定を締結したタイ

国カセサート大学学生への研修（図9と10）、本学附属とわの森三愛高等学校獣医進学コースにおける入門的な講座、一般市民向けの愛護法対象の爬虫類・鳥類・哺乳類の公開講座、日本野生動物医学会主催スチューデント・ショート・コース（SSC）<sup>[26]</sup>（図11）、寄生虫病学実習（寄生性扁形動物、節足動物、原虫編の6コマ）における指導などもゼミ生が演習の一環として実施した。このような活動は、まさに、文部科学省が提唱しているアクティブラーニングの



図 6 佐呂間町における出張講義の一コマ



図 7 日本獣医師会主催アジア地域臨床獣医師等総合研修事業の様子

実践であり、ゼミ生にとっても有効な教育的機会となろう。なお、日本野生動物医学会では隔年で入門講座を実施しており、今年は野生動物医学会の直後、埼玉県で実際され、50名以上の学生を対象に座学が実施された（図12）。

#### 外部資金による調査活動

京都大学霊長類研究所共同利用・共同研究制度で（著者が代表、本学・萩原克郎 教授が共同研究者）、2017年6月、昨年に続き福島県内各地の東日本大震災被災地となった無人地帯におけるニホンザルなどの被害状況を実見した。また、平成29年度厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金を活用し同町で捕獲されたキツネ、ノイヌ、ノネコ、交通事故により死亡したタヌキやイタチなどの寄生虫保有状況の調査を実施している（図13と14）。

#### 大学院教育

大学院も教育の実質化が求められており、著者も関連の特別講義を用意した。特に印象に残ったものが、瓜田千帆子獣医師による英国獣医系大学院の滞在記に関するものであった。彼女は本学獣医学類を2014年度に卒業し、在学中はWAMCを拠点に飼育



図 8 米国フィンドレー大学 PreVet 課程などの学生対象の授業参加者

イルカ類の新たな寄生虫病検査手技を研究していた。卒業後、英国ウェールズに所在する University of Bristol の大学院、野生動物医療と保全・動物福祉系専門職修士課程（MSc Global Wildlife Health and Conservation 課程）に入学した。彼女の修士論文は飼育フクロウ類糞便を用いたストレス評価であった。最近は繁華街の専門カフェなどが開店しているように、フクロウ類の飼育が活況を呈している。そ





図 9 タイ国カセサート大学獣医学部生への研修の様子



図 10 図 9 の続き



図 11 日本野生動物医学会主催夏季授業 WAMC-SSC（今年は東大とマレーシア国サバ大からの参加者を得て実施）





図 12 日本野生動物医学会主催入門講座の夕食時の様子



図 13 厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金研究拠点となる施設（左：環境省厚岸水鳥館）とその周辺の環境（右）



図 14 別寒辺牛湿原内の道路で発見された外来種ニホンイタチの交通事故死体

の一方で、ヒトと密接に接することにより、過剰なストレスを受けている可能性も指摘されている。そこで、そのような店舗で飼育されていた個体の糞便内のステロイドホルモン濃度を指標にストレスの状況把握の検査手法の確立を試みるというものであった。この論文が認められ、2017年秋に修了し、現在、帰国をしている。11月に来道されるのを契機に、本学就職課に進路に関するセミナーを開講した。獣医系大学院は世界大学ランキングでも、米国と英国の大学が軒並み上位を占め、実際、先進的な知識と技量、さらには修了後の関連職域への就業とネットワーク形成を鑑みても、野生動物医学領域ではこのような大学院は第一選択となる。本学にも国外で獣医療あるいは保全の実践を学びたいと真剣に考える学生も多く、多くの参加者を得た。本学大学院は、

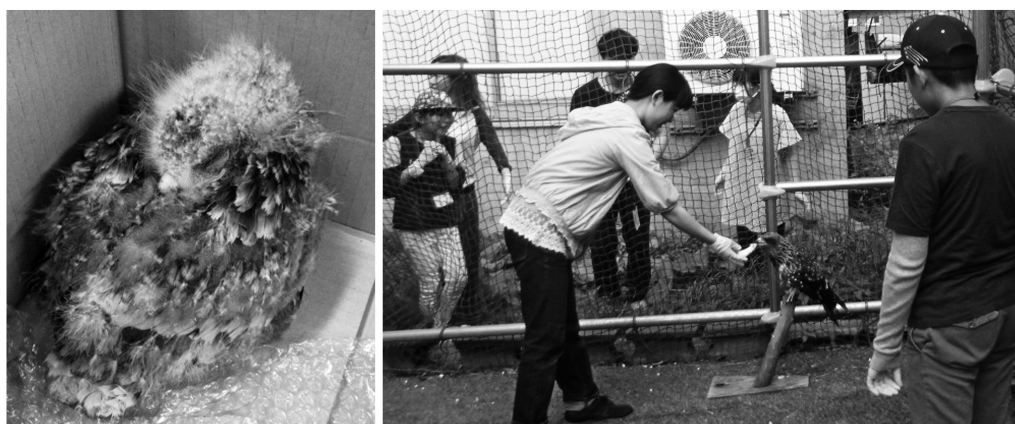


図 15 WAMC に搬入されたトビ雛（左）がゼミ生の世話で成鳥にまで生育した様子（右）



図 16 エディンバラ大学 Anna Meredith 教授の視察

現在では酪農学研究科と獣医学研究科に分かれているが、2020 年度には両研究科が統一される予定である。その際、WAMC もこのような学生の受け皿として機能する必要がある。

著者は、現在、大学院生 1 名と大学院研究生 2 名を受け入れている。当該院生は関西地方の鳥類専門施設に勤務にすることから、(国研) 国立環境研究所・大沼学主任研究員と共同で鳥類疾病の防疫をテーマに研究をしており、2017 年の研究編で紹介予定であるが、刊行実績に加え、国際学会を含む学会報告もなされた(表 1-1 および-4)。前年の教育編<sup>[2]</sup>でも触れたが、本学・鈴木一由 教授、林 英明・佐野忠士 両准教授の支援を得て、北九州に所在する動物園の獣医師に博士号を得て頂いた。これが弾みとなり、学会報告の中には鈴木 教授および林 准教授が指導される研究発表が散見される(表 1)。

#### 施設利用状況、傷病鳥獣救護および マスクミ対応など

2017 年の WAMC 入退記録によると延べ 213 名となった。昨年までは、学生サークルのネットワークなどを通じ、WAMC 視察を呼びかけていたが、今年はこのような機会が少なかったことが判った。また、見学をしてもらった傷病個体も少なかったことも影響している。WAMC の研究活動に支障がない限り、市民や学生などが持ち込んできた傷病鳥獣を救護しているのは例年の通りである。特に、今年は雛で収容されたトビの飼養が印象的であった(図 15)。野生動物医学にはこのような野生動物の医療やリハビリテーション術なども含まれているので、自然生態系の保全あるいは希少種の増殖に繋がることは稀であっても、ゼミ教育に資するとして引き受けている。WAMC に搬入された救護個体の今年の実績はこのトビを含め、鳥類 4 種 4 個体および哺乳類 1 種 1 個体(タヌキ)であった。WAMC を視察された方のお一人にエディンバラ大学獣医学部動物



園学・保全医学教授 Anna Meredith 教授（8月15日）がいた。本学・疫学の蒔田浩平准教授のご紹介であったが（図16）、ちょうど、大学近隣で盆踊り（文京台第二自治会主催）の準備が進んでいたの、急遽、参加をしてもらった。

### ま と め

WAMC は、創設以来、概念 One Health（これを実践する分野が保全医学）を基軸に、野生種・園館飼育種・特用家畜・エキゾチックペットなどの寄生虫病をモデルに教育・研究活動を展開してきた<sup>[22]</sup>。しかし、2017 年はこれらに加え、渡り鳥の高病原性鳥インフルエンザや動物園飼育有袋類の LJD などこれ以外の疾病についても扱われた。その要因は博士課程院生や論文博士の研究生の存在が大きい。すなわち、大学院における教育と研究が WAMC の活動の範囲を規定していたことが再確認された。また、2018 年からはコアカリ科目である野生動物学が獣医学類で開講される（4 年後期、必須）。これに加え、（著者が出向中である）獣医保健学類でも野生動物医学概論の科目も始まるので、その基礎固めも重要な課題である（表1-6）。したがって、大学院生が最終学年をむかえる 2018 年はこれまで以上の大学院教育への傾注に加え、新科目への対応（学部教育）にも目配せをしなければならない。特に、これらの教育展開では WAMC を拠点に培われたネットワークがますます重要になるであろう。

なお、冒頭の One Health にいては、最近、獣医師会や獣医学会でも、積極的に取り上げる傾向が強い。野生動物医学は、まさに、One Health を実践する学問領域である点を鑑みれば歓迎すべきことである。しかし、実際にこのような分野を扱う国際学会に参加しても、日本からの参加者が皆無であった場面に遭遇すると、単なる掛け声だけなのかと不安を覚えることある<sup>[18]</sup>。WAMC としては、今後も、WAMC を単なる理念に終わることなく、具体的な中身に踏み込んでの教育研究の実践に努めたい。

### 引用文献

1. 浅川満彦. 2017. 2016 年における酪農学園大学野生動物医学センター WAMC の研究活動報告. 北獣会誌, 61: 41-47.
2. 浅川満彦. 2017. 2016 年における酪農学園大学野生動物医学センター WAMC の教育・啓発活動報告. 酪農大紀, 自然, 42: 73-81.
3. 浅川満彦. 2017. 書評『カエルはお腹で水を飲む? — カエルの皮膚 — その意外な役割』, 獣畜新報, 70: 752.
4. 浅川満彦. 2017. 書評『テントウムシの島めぐり — ゲッチョ先生の楽園昆虫記』日本生物地理学会報, 71: 301-302.
5. 浅川満彦. 2017. 書評『ネコがこんなにかわいくなった理由』, 獣畜新報, 70: 52-53.
6. 浅川満彦. 2017. 書評『絵でわかる寄生虫の世界』, 獣畜新報, 70: 52.
7. 浅川満彦. 2017. 書評『日本の動物法 第2版』, 畜産の研究, 71: 96.
8. 浅川満彦. 2017. 書評『これからの爬虫類学』, Zoo and Wildlife News (野生動物医学会ニュースレター), (44): 24.
9. 浅川満彦. 2017. 書評『ウマの科学』, 畜産の研究, 71: 539-540.
10. 浅川満彦. 2017. 書評『心を操る寄生生物』, 北海道新聞, 2017 年 6 月 18 日朝刊 15 面.
11. 浅川満彦. 2017. 書籍紹介『協力と罰の生物学』, Zoo and Wildlife News (日本野生動物医学会ニュースレター), (45): 34.
12. 浅川満彦. 2017. 書籍紹介『生き物たちの化学戦略』, Zoo and Wildlife News (日本野生動物医学会ニュースレター), (45): 35.
13. 浅川満彦. 2017. 国外学生を対象にした野生動物医学研修と日本人学生への波及効果. (北海道教育大学編) 第 66 回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会研究集録: 42-51.
14. 浅川満彦. 2017. 環境教育における野生動物救護活動が果たす役割. WRV ニュースレター, (100): 20-21.
15. 浅川満彦. 2017. ヤケンとの連携による野生動物医学研究概要. 酪農学園大学野生動物生態研究会 2016 年度報告書『夢喰』, (35): 4.
16. 浅川満彦. 2017. ブータン王国における家畜および野生動物関連施設の視察報告. 北獣会誌, 61: 81-83.
17. 浅川満彦. 2017. 酪農学園大学獣医学類における日本獣医師会主催「女性獣医師の就業を支援するための獣医学生向けセミナー」開催報告と学生の反応. 日獣会誌, 70: 420-422.
18. 浅川満彦. 2017. クリューガー国立公園で日本の One Health ブームについて思う. Zoo and Wildlife News (野生動物医学会ニュースレター), (45): 18-20.
19. 浅川満彦. 2017. 書評『パンダ ネコをかぶった珍獣』, 哺乳類科学, 57: 401.
20. 浅川満彦. 2017. 書評『湿地の博物誌』, Field



- Note (WMO), (136) : 8-9.
21. 浅川満彦. 2017. 書評『ボクが逆さに生きる理由』——摂食, 飛翔…疑問の嵐に答える. 北海道新聞朝刊 2017 年 12 月 3 日版, 11 面.
  22. 浅川満彦. 2017. 「研究を基盤にした教育」をするのが大学. FMICS (高等教育問題研究会), (693/694) : 14.
  23. 浅川満彦. 2017. 第 3 回野生生物の寄生虫に関する国際会議に出席して. 日本獣医寄生虫学会誌, 16 (1/2) : 29-32.
  24. 浅川満彦. 2018. 2017 年における酪農学園大学野生動物医学センター WAMC の研究活動報告. 北海道獣医師会誌, 62 : 印刷中.
  25. 近本翔太・浅川満彦. 2017. 書籍紹介『感染症の生態学』, Zoo and Wildlife News (野生動物医学学会ニュースレター), (44) : 25.
  26. 金谷麻里杏・浅川満彦. 2017. 書評『野鳥界識別編』／『同 生態編』, 日本鳥学会誌, 66 : 64-65.
  27. 川久保和希・浅川満彦. 2017. 2017 年度酪農学園大学野生動物医学センターにおける日本野生動物医学会主催 SSC (Student Seminar Course) の実施報告. Zoo and Wildlife News (野生動物医学学会ニュースレター), (45) : 8-11.
  28. 長濱理生子・浅川満彦. 2017. 書籍紹介『コアカリ 野生動物学』, FIELD NOTE (株式会社野生動物保護管理事務所), (134) : 8-11.
  29. 佐々木 梢・浅川満彦. 2017. 書籍紹介『湿地帯中毒——身近な魚の研究史』, FIELD NOTE, (株式会社 野生動物保護管理事務所) (135) : 6-7.
  30. 佐々木 梢・伊東隆臣・浅川満彦. 2017. フグ類の眼周囲皮下寄生の線虫. MP アグロジャーナル, (29) : 49-50.

## 要 旨

2017 年における酪農学園大学野生動物医学センター WAMC の教育・啓発活動報告を行った。

## Summary

An annual report of educational activities performed by the Wild Animal Medical Center of Rakuno Gakuen University in 2017 was given.

